1. 大学院生研究交流集会
台湾大学・名古屋大学　第2回大学院生研究交流集会

人類文化遺産テクスト学センター、台湾大学日本研究センターとの共催

2015年4月17日（金）
会場：名古屋大学情報文化学部4階　多目的講義室

【論文発表1】

鄧宜欣（台湾大学日本語文学研究所・修士課程）
「元禄享保期の経世思想―荻生徂徠と太宰春台を中心に―」

藍雯威（台湾大学日本語文学研究所・修士課程）
「近世における岡山藩の教育―郷学校である閑谷学校を中心に―」

山田裕輝（名古屋大学文学研究科博士課程後期課程）
「幕末期の英国軍艦下関来航問題と萩藩―安政六年と文久元年の事例から―」

司会：辻本雅史（台湾大学日本語文学系教授）／コメント：阿部泰郎（名古屋大学文学研究科教授）

【論文発表2】

王偉玲（台湾大学日本語文学研究所・修士課程）
「中江兆民の近代的人間観の形成―リベルテーモラルについて―」

江俊億（台湾大学中国文学研究所・博士課程）
「「意」を中心として吉村秋陽と大橋訥庵の〈格致臆議〉論争を見る」

佘筠珺（台湾大学中国文学研究所・博士課程）
「久保天随の各版の『秋碧吟廬詩稿』の性質と原稿の「論評」現象―『詩苑』に収録された詩・詞を参照」

司会：池内敏（名古屋大学文学研究科教授）／コメント：阿部泰郎（名古屋大学文学研究科教授）

【論文発表3】

安井海洋（名古屋大学文学研究科博士課程後期課程）
「徳田秋聲『黴』の同時代評分析」

張文聰（名古屋大学文学研究科博士課程後期課程）
「帝国下の妻たち―張文環の『闘雞』と太宰治の『水仙』をめぐって―」

李明書（台湾大学哲学研究所博士課程）
「日本における「批判仏教」後の発展の方向：哲学的・生命倫理学的アプローチを考察の手掛りとして」

司会：飯田祐子（名古屋大学文学研究科教授）／コメント：曹景惠（台湾大学日本語文学系教授）

【論文発表4】

李品儀（台湾大学人類学研究所修士課程）
「「日本に通し、台湾は魂を現代に任した」：日治時代台湾における日本カフェ文化の伝承と改造のその文化史の研究」

松山由布子（名古屋大学文学研究科博士課程後期課程）
「愛知県奥三河地域の花太夫と病人祈祷―『御歳徳神祭文』を中心に―」

秦勤（名古屋大学文学研究科博士課程後期課程）
「同志としての中国、クィアとしての日本――日中クィア映画祭における交渉」

司会：藤木秀朗（名古屋大学文学研究科教授）／コメント：林立萍（台湾大学日本語文学系教授）

2.「アジアの中の日本文化」研究セミナー

2015年 7月・11月
会場：名古屋大学大学院文学研究科１階 大会議室

【セミナーIX】
2015年7月13日

美輪明宏のクィア・スターダム

講師：菅野優香（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員）
司会：藤木秀朗

【セミナーX】
2015年11月2日

『女人藝術』の人々と私

講師：尾形明子（文芸評論家）
司会：飯田祐子

【セミナーXI】
2015年11月27日

文学が歴史を、歴史が文学を問いただす
――原爆言説と日米関係――

講師：柴田優呼（ニュージーランド・オタゴ大学所属）
司会：藤木秀朗

3. 国際シンポジウム
Un/Representation: New Approaches to East Asian Humanities
表象されること／されないこと：東アジア人文学への新たなるアプローチ

日時：2016年1月30日［土］・31日［日］
会場：名古屋大学文系総合館7階　カンファレンスホール　※同時通訳：日本語ー英語

歴史と文化の表象は、学術研究、マス・メディア、ソーシャル・メディア、視覚芸術、映画などを問わず、常にすでに選択的なプロセスであり、内包と排除の両方を伴っている。換言すれば、それは、想起することと忘却すること、イメージすることと無視することを結びつけるヤヌスの顔をもつプロセスである。表象することと表象しないことのこの二重のプロセスは過去、現在、そして未来の可能性について偏向したイメージを生み出す。通常、研究者は表象の表側に焦点を合わせる。本シンポジウムでは、日本と東アジアの文脈における人種／民族、性／ジェンダー、セクシュアリティ、年齢、政治的代理表象の表側と裏側の両方を探究することにより、人文学全般と東アジア研究に対して新たなアプローチを提案する。多様な学術領域を専門とする報告者によって、科学技術的近代主義の隠れた物質的側面から、日本と内的・外的他者との関係や、主流をなす「日本らしさ」のヘゲモニックな言説に内在する権力関係に至るまで、幅広い問題が提起されるだろう。

Representation of history and culture, whether in academia, mass/popular media, visual and film art, etc., is always-already a selective process that includes both inclusion and exclusion. In other words, it is a Janus-faced process combining remembering and forgetting, imagining and ignoring, representation and un/representation. This twinned process of un/representation produces biased images of the past, present, and possible futures. Typically, scholars focus on the obverse of representation. By exploring both obverse and reverse using case studies of subjects including race/ethnicity, sex/gender, sexuality, age, and political representation from Japanese and East Asian contexts, this conference will suggest new approaches to the humanities generally and East Asian studies specifically. Speakers from diverse disciplinary backgrounds will address a broad range of issues, from the hidden materiality of technological modernism to Japan's relations with internal and external others and the power relations immanent within hegemonic discourses of mainstream "Japaneseness."

1月30日［土］

◉新世代パネル「空の近代」

大山 僚介（名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程）
「1930年代〜敗戦までの「航空日本」像」

鈴村 麻里子（三重県立美術館学芸員）
「パリ包囲（1870〜71）以降の美術にみる「気球」」

藤田 祐史（名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程）
「「天の川」句考――芭蕉と小説」

潘 沁（名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程）
「ラピュタへ飛ぶ――『天空の城ラピュタ』におけるクラウドスケープ」

ディスカッサント：馬場 伸彦（甲南女子大学・教授）
司会：大山 僚介、藤田 祐史

◉セッション1

アレクサンドラ・コブルスキ（フランス・社会科学高等研究院（EHESS）・研究員）
「明治を設計する―エンジニアと技術者たちは新国家建設のためにいかに日本の近代という神話をめぐって働いたか」

笹沼 俊暁（台湾・東海大学・副教授）
「陳舜臣文学のなかの台湾―冷戦期の作品を中心に」

劉 文兵（東京大学学術研究員）
「「表現せよ」と「表現してはいけない」のはざまで―中国抗日映画・ドラマの戦争表象における抑圧の問題」

ディスカッサント：咸 忠範（韓国・漢陽大学校）
司会：ネイスン・ホプソン（名古屋大学）

1月31日［日］

◉セッション2

イナ・ハイン（オーストリア・ウィーン大学・教授）
「日本メディアにおける沖縄の表象―支配的イメージと反物語」

鄭 珉娥（韓国・韓神大学校・兼任教授）
「韓国と日本の慰安婦ドキュメンタリー表象における（不）可視化された女性」

眞野 豊（九州大学大学院地球社会統合科学府博士課程後期課程）
「学校空間におけるクィアネスの黙殺と想像」

ディスカッサント：呉 佩軍（華南師範大学校）
司会：岩田クリスティーナ（名古屋大学）